

公開特許公報 (A)

昭55-50217

Int. Cl.³
G 02 C 11 00

識別記号

庁内整理番号
7174-2H

公開 昭和55年(1980)4月11日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 5 頁)

眼鏡

-402

特 願 昭53-123661
出 願 昭53(1978)10月9日
発 明 者 徳田昭出 願 人 徳田昭
東京都渋谷区代々木5-15-10
-402
代 理 人 弁理士 松下義勝 外2名

東京都渋谷区代々木5-15-10

明 細 書

1. 発明の名称

眼鏡

2. 特許請求の範囲

眼鏡フレームの少なくとも一部内に着脱された電極体を装着させて電流を特設とする眼鏡。

3. 発明の詳細な説明

本発明は、眼鏡、特に、疲れ眼等の治療に好適であり、しかも、人体に適用されたときにも、ほとんど眼がつかれることのない眼鏡に係る。

最近、新しい医学として電気医学が脚光を浴び、とくに電気医学は、電気と生体反応との関係は研究され、それをもととして電気の電流を生体の治療等に適用することが行なわれている。

また、現在の電気医学を大別すると、その適用対象から、直接に電気を治療手段として人体等に適用するものと、磁力線としての電磁場を人間の病気の発見手段として用いることとに分けられる。

また、最近には、このような電気医学の研究の成果にのつとつて、種々の電気治療器が開発され、これら機器の中には、その効果があまり確かめられていないものも見受けられるが、所定の医学的効果がすでに立証されているものもある。

例えば、所定の医学的効果が立証されている電気治療器具としては種々のものが提案実施されているが、その中で、電気バンドと称する腕輪、腹帯、指輪、くびき等が最も普及されていると云える。これらの器具はどれも人体中の血液の循環性の向上を目的としたものであつて、血液分子がイオン化して流動しているため、外部から電気を与えることによつて血液中に微弱な電流を流して附勢し、血液の循環性を向上させるものである。このため、人体の一部に磁力線の電磁場を装着すれば、それによつて血管の周囲に磁場が形成するため、その血管中を流動する血液には、力が与えられ、血液の循環性が向上し、肩こりや、その他の病気がなおされ

るとされている。

しかしながら、従来例では、上記の鏡等の治具に適用されるものは提案実施されているが、最も日常において使用する鏡の保全、治具に関するものは提案されていない。

すなわち、一般に近視、遠視等には眼鏡の着用によつて視力を正視状態に保持することが行なわれているが、最近では、眼鏡のファッション化によつてなるべく薄いフレームや、審美的デザインのフレーム等が提案実施されている。このため、疲れ眼の場合等に、この眼鏡の一部に磁性体等を装着することが行なわれているが、外装が損なわれ、実用に供することが困難である。

また、眼鏡の眼鏡部分を磁性体によつて環状に成形することも考えられる。この点、従来から、鉄その他の磁性材料に磁性を附した指輪や磁性腕等を組込んだ首かざり等が知られているが、前者の指輪は、鉄その他の金属材料を円若しくはだ円状に成形し、それを覆って磁性を附

(3)

以下、図面によつて本発明の実施態様について説明する。

まず、第1図ならびに第2図はそれぞれ本発明の一の実施例に係る眼鏡の斜視図であつて、第1図ならびに第2図において、符号1は眼鏡部、2はつるを示し、通常の眼鏡と同様に、2つの眼鏡部1とつる2とから眼鏡フレームは成つて、このフレームの各眼鏡部1にはそれぞれレンズ3がはめ込まれて構成されている。

次に、上記構成に係る眼鏡フレームの少なくとも一部の中に、充填された充填体5を収容し、この充填体5は眼鏡フレームの外部に露出しないよう構成する。

すなわち、第3図は一つの眼鏡部1の斜視図であつて、この場合は、眼鏡部1は外装チューブの如き包囲体1と充填体5とから成つて、このチューブ1は、通常の眼鏡と同様に、金、銀、銅その他の磁性体に優れる金属から構成すれば十分である。一般に、眼鏡は、通常の指輪その他の装身具と同様にファッション化傾向が

(5)

したものであつて、大きな磁性を附するために、通常は、材質そのものをフェライトその他の磁性体から構成されている。しかしながら、そのような磁性体では一般に加工性が劣り、製造する以外は、円若しくはだ円状に加工成形することは困難であり、外観に優れ、眼鏡部分とならうる環状体を構成することができない。これに対し、外観や加工性に優れ耐食性を持つ素材を予め、だ円若しくは円に成形し、その後、磁性を附しても、例えば炭素鋼等では附される磁性に制限され、何々磁気的効果の大きいものが得られない。

本発明は、上記欠点の解決を目的とし、とくに、眼鏡フレームの中に、少なくとも一部が充填された充填体を収め込んで成つて、外観が全く損なわれることなく、耐食性に優れる眼鏡を提案する。

すなわち、本発明は、眼鏡フレームの少なくとも一部内に充填された充填体を収容させて成ることを特徴とする。

(4)

大きく、とくに、外周のチューブ1は、装飾的要求が大きく、更に、人体の一部に常に接近若しくは接触するため、通常は、金、その他の影響を受け、耐食性に優れることが要求される。このため、眼鏡フレームは、金、銀、プラチナその他の貴金属から構成するのが好ましい。このため、本発明においてもチューブ1は貴金属から構成し、この中に充填体5を組合わせて眼鏡フレームを構成する。

また、このように外装チューブ1の中に充填体5を収め込んで、この充填体5の少なくとも一部は充填して磁性を附する場合に、充填体5にはなるべく大きな磁性が与えられることが好ましい。このために、充填体5は、通常、連続した樹材若しくは粉状材として構成するのが好ましいが、所望に応じて、充填体5の一部のみを磁性材料から構成することもできる。

また、上記の通りにチューブ1に充填体5を収め込んで、それを眼鏡部1の形状に成型する場合は、充填体5は粉状材が成型性に優れる

(6)

材料から構成することが好ましいが、

1 a に充填体 5 を完全に嵌め込むためには、チューブ 1 a が充填体 5 に比べて延展性に優れるものから構成するのが好ましい。

例えば、第 3 図に示す如く、管状チューブ 1 a 中に線状材から成る充填体 5 を嵌め込む場合は、これらの間に空隙が存在すると、その周囲に形成される磁界が乱れ、磁気が漏洩して好ましくないが、チューブ 1 a の中に線状の充填体 5 を空隙なく整合させて嵌め込むことは不可能に近い。むしろ、チューブ 1 a の中に充填体 5 が嵌め込まれたときは、その間に、多かれ少なかれ空隙若しくは間隙が存在する。この場合、チューブ 1 a が充填体 5 に比べて延展性に優れていると、チューブ 1 a の中に充填体 5 を嵌め込んだ状態で、更に所定の圧延成型することによつて、チューブ 1 a は伸ばされて空隙をほとんどなくすることができるほか、包囲体 1 a の肉厚も薄くすることができ、とくに、包囲体 1 a を貴金属から構成する場合は、貴金属が節約できて

(7)

等を除き、第 4 図(c)の如く、一体にする。また、これを例へば眼鏡部 1 の如く環状に構成する場合は、プレス等で環状に成形し、その端部を溶接し、所定に応じて熱処理後、磨光すれば良い。

なお、充填体 5 を磨光する場合は、その周囲に少なくとも 2 個の径をおき、その上で磨光すれば、容易に環状の磁性体が構成できる。

以上詳しく説明した通り、本発明はフレームの少なくとも一部に磨光された充填体を嵌め込んで成るものであるから、着用したときに、充填体からの磁気が眼の周囲の血管等に作用し、血液の循環を促進して疲れ目等が生じることがない。

また、第 2 図に示す如く、つる 2 の一部に充填体を嵌め込むことができ、この場合は、第 4 図(c)の状態のものをつるのように構成すれば十分である。

4. 図面の簡単な説明

第 1 図ならびに第 2 図は本発明の一つの実施

(9)

好ましい。

また、充填体 5 は磁性が大きいものは成型性が損なわれるが、例えば、Cr、Co 等を含む鉄系合金等は、磨光性に優れると同時に成型性に優れて好ましく、また、たとえ成型性の悪い充填体の場合でも片状のものとして充填すれば容易に所望形状に成型できる。

また、上記の如く、チューブ 1 a の中に充填体 5 を嵌め込む場合に、種々の組込み法が考えられるが、チューブ 1 a の端から充填体 5 を差込み、そのローラ等をかけて所望形状に圧延成型する。この場合、チューブ 1 a の断面形状は、後記の充填体 5 の断面形状よりやや大きく形成し、例えば、充填体 5 の形状が、三角形、四角形若しくは一部が円弧状のものであつても、チューブ 1 a の断面は、円形状に構成する（第 4 図(a)参照）。その後、このチューブ 1 a の一端から、充填体 5 を挿入し、第 4 図(a)に示す如く、組合わせる。その後、組合わせた状態でカリバー付ローラ等によつて圧延し、例えば、間隔 4

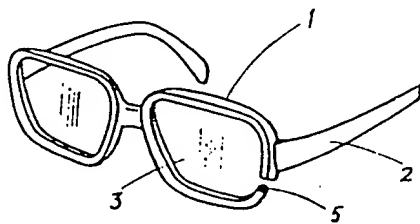
(8)

例に係る眼鏡の斜視図であり、第 3 図は眼鏡部の一例の一部を断面で示す斜視図、第 4 図(a)、(b)ならびに(c)は眼鏡部等の製作過程の説明図である。

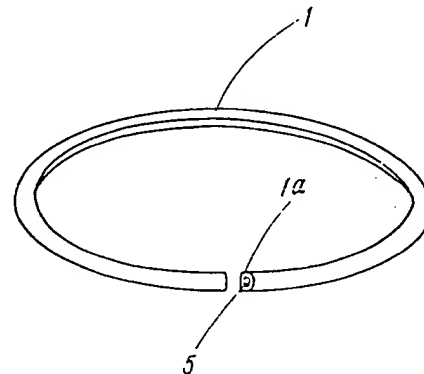
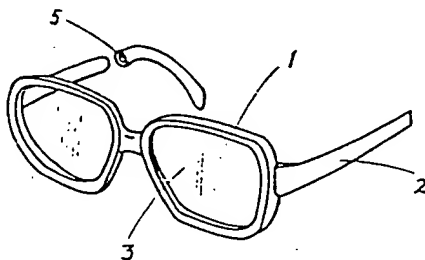
符 号 1 ……眼鏡部 2 ……つる
3 ……レンズ 5 ……充填体

特許出願人 徳 田 昭
代 理 人 井 理 士 松 下 義 研
 阿 瀬 川 幹 夫
 阿 瀬 川 敏

第3図



第2図



手続補正書（方式）

昭和54年2月16日

特許庁長官 熊谷 豊二 殿
 特許庁審査官

1. 事件の表示

昭和53年 特許庁第123664号

2. 考案の名称 眼鏡

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

居 所 東京都渋谷区代々木5-15-10-402

名 称 徳田 昭

代表者

4. 代理人

住 所 東京都中央区銀座3丁目11番5号
 〒104才二中山ビル3階電話(541)7625・7615

氏 名 (7610) 井塚士 松下 毅 勝

5. 補正命令の日付 昭和54年1月30日

6. 補正により増加する発明の数

7. 補正の対象 図面（第4図）

8. 補正の内容 別紙の通り

